

日程	場所	内容
8月25日	ふれあいセンターやぶ	県民交流広場事業の成果視察及び意見交換
	城崎国際アートセンター	活動内容視察及び意見交換
8月26日	但馬県民局	県民局での主な取組み等についての説明
	但馬国出石観光協会 &出石まちづくり公社	活動内容視察及び意見交換
	温泉バイナリー発電施設	再生可能エネルギー推進事業視察
8月27日	丹波県民局	県民局での主な取組み等についての説明
	市島町被災地域	被害状況および復旧状況視察

現地調査内容

ふれあいセンターやぶ

保育園跡地を改修して地域住民が集まれる施設を整備。養父地区でも高齢者数や独居者数が増加しており、特に冬は雪が深くなることから家に閉じこもりがちになるため、地域住民同士の交流（見回り）の重要性はより高くなっている。

【養父地区】	世帯数	人口	65歳以上	独居者
平成25年	882	2413人	820人(34%)	129人(14.6%)
平成26年	881	2373人	837人(35.3%)	136人(15.4%)

子育て支援（子育てサロン、親子グランドゴルフ大会、親子料理教室）や小学校との連携（校庭整備、通学路点検）、地域行事の支援、交流会（世代間・地域間）、防災訓練など活発にユニークな活動も多く行っているが、やはり運営費の調達が問題となっている。

運営・活動費の問題は、どのNPOにも共通の課題であり、公的資金（助成金など）だけでなく、外部から独自に調達できるような方法（収益事業など）を構築する必要がある。

センターでは既に「ふれあい喫茶」や「デイサービス」などの収益（の可能性のある）事業実施を検討されており、注目すべきと感じた。また「養父はかつて鯉の産地として名を馳せたことから、鯉を活かした地域おこしを」との意見もあり、是非とも成功させて頂きたい。

一方で、紅葉の時期には数万人が観光に訪れるという養父神社では、さほど地域にお金が落ちていない。竹田城跡がそうであるように、「観光客数」と「地元の活性化」は必ずしも厳密に一致しない。このような行事で養父をアピールできるもの（お土産）を販売することで、地域おこしと収益を上げて欲しい。

城崎国際アートセンター

元は県施設（会議場）として建設されたが、地方分権名目で豊岡市に移譲（修繕・改修費付き）。市が使い方を検討した結果、“アーティスト・イン・レジデンス”（芸術家に対して滞在できる場所を提供し作品制作を行ってもらおうという事業）の拠点として整備された。

使いたいという応募に対して審査を行い、有能な芸術家（基本的に売れる前で裕福ではない）に、無償（食材費などは除く）で提供する。

市担当者のお話では「年間の持ち出し（市税の投入）は約 1800 万円（予算）に上るが、その代わりここで製作された作品が世界的に有名になれば、“城崎（兵庫県・豊岡市）発祥”として地域の知名度も上がり、観光地としての大きなメリットになることを見込んでいる。」という。

一見すると、投資額に対して効果（知名度アップ・観光客増加・芸術振興など）が明確に見えにくく、また短期間で現れるとも限らないため、この部分は丁寧に（他施設の成果や予想される効果を具体的な数字にまで落とし込んで）説明する必要がある。

パンフレット等からは、特に“舞台芸術”を押し出しているように感じたが（確かに「大ホール」は大型会議の誘致などに不可欠なため有効に使えるのは舞台芸術ということになるが）、他の分野も受け付けているとのこと。

個人的にはどうしても「城崎にて」が思い浮かぶし、文学作品や絵画の方が地名や風景がそのまま作品の中に出てくる可能性が高いように感じる。その他にも、たとえば彫刻家の作品などは寄贈を受けて街中に配置することも可能だろうし、舞台芸術でも滞在中に大ホールで公演を行い温泉に来た観光客が楽しめるようなコラボレーションも可能ではないか。風光明媚な温泉街とアートのコラボレーションによる地域おこしに大いに期待したい。

但馬国出石観光協会

観光協会で NPO 法人格を取得（※他の観光協会は大半が市町からお金や人員が投入されており独立性が低い）。会計など手続きは煩雑になる（人手＝コストがかかる）が、市（行政）からある程度独立した自由度の高い動き方が可能。

出石観光協会では、（観光）道案内アプリの提供やホームページの外国語対応など時代に応じた対策や、イベント参加・宣伝方法やパンフレットの作り方一つをとっても、「目玉を設定し特化する」という行政には実践しにくい（平等・公平が損なわれているとの批判があがりやすい）手法が取り入れられているように感じた。

（※決して行政にできないことはない。）

また、企業の協力を得て、街なかに公衆無線 LAN の設置を進められている。主に（外国人）観光客が出石観光ホームページなどにアクセスできるようにする＝“パンフレットのペーパーレス化”を目的としている事業だが、非常に効果的。県全域で取り組むべきと思う。

出石は宿泊が弱い。「城崎に泊まる“ついで”におそばを食べに立ち寄る」というイメー

ジが強いが、宿泊施設（ホテル）を建設するとなると、景観が破壊されるだけでなく、宿泊客に向けた夜の歓楽街といったサービスも始まる（必要となる）可能性が高い。

「宿泊客獲得に向けた戦略があるのでしょうか？」と聞くと、「昼の観光が出石らしい」「城崎温泉（車で20分程度）との棲み分けをしている」旨の返答。意識的にそうできているのかまでは分からないが、地域間で連携・魅力を終結してより強い観光地を目指す体勢ができていると感動した。

人口減少。国内でのパイが増えないことを前提に都市間競争が激化してきているなかで、非常に重要な視点であり、どの地域でも見習うべき視点だと思う。

出石まちづくり公社

そんな、宿泊施設が乏しい出石で、空家利用とからめてはじまった事業が「旅籠西田屋」。空家となった古民家を改修して、宿泊や宴会ができる施設として貸し出す。家族連れや同窓会の宴会場として上々の利用が集まっているとのこと。

古いまちなみ（景観）を保存するためには、大型ホテルなどは建設できないし、大量のツアー客でまちが占拠されるのではなく、景観保存（空家活用）と静かな夜の出石を楽しみたい宿泊希望者の両立が見事に図られている。

温泉パイナリー発電施設

兵庫県内で初めて温泉（地熱）を利用した発電（再生可能エネルギー）の試験的施設として、8000万円の基金を導入して建設。平成26年4月始動したが、現在までの発電量は当初計画の半分程度（予想年間*実質発電量=約90,000kwh）*発電自体に電力消費するただし、冬（低気温）の方が発電効率は上昇するとのこと。

発電電力を売電せず町の温泉施設で自家消費（再生エネでは売電するより利益は低い）しているのは、①助成金で建てた発電施設からの売電は通常の半値程度になること。②売電用の施設建設に費用がかかること。が理由とのこと。

この施設では、あくまでも災害時などに避難所となった際に電源が確保でき、町民の通信手段や人工透析用の電源を提供することに重点を置いているとのことであるが、基金を投じた試験的な施設でもあるから、県内の他地域での導入を促進するような（一般的に効率のよいと言われる地熱発電だけに注目度は高く経済的にも高効率な）データが得られることを願う。

丹波市市島町 被災地域

谷でも沢でもない山の斜面が唐突に滑り落ちていた。遠くから山をよく見ると、木々の間に段差がかすかにできているように土砂崩れの跡が至るところにある。よく災害を獣か何かにとえて被害の様子を「爪あとを残す」と表現するが、本当に大きな獣が爪で山を引っかいたような傷に見えた。

山が崩れる理由として、植林とその放置（同じ樹木ばかりで根の深さが同じ＝根の層ごとと滑り落ちる。特に近年は間伐がなされず木が細く根も貧弱になっている）が指摘されるが、現場の県職員（土木の専門家）に話を聞くとそういった次元ではないという。

「報道されているような集中豪雨（具体的には 1 時間に 100mm を超えるような）が降れば、どの山も崩れてくる危険がある。」

「近年雨の降り方（気象）が変わってきているのではないか」

この状況では、まず気象（変動）の解明とその解決。あわせて、山が崩れるものと想定しての対策を進めていかなければならない。

住む地域の制限については東日本大震災で大きな論点となっているが、他人事ではなく災害大国日本に住む全ての国民が自分のこととして考えなければならない。

さらにもう一方で、住む場所は変えられない、災害も防げないことを前提とした状況で安全に逃げる手段を準備しなければならない。

以上

丹波市市島町被災地域

